

2009年本願寺教学シンポジウム

…真宗の土徳「地域に薫る念仏」…

2009(H21)年 12 月 31 日(木)

1. はじめに

平成 21 年 12 月 15 日(火)午後聞法会館にて「真宗の土徳～地域に薫る念仏」と題するシンポジウムが開催されました。これは、教学伝道研究センターが親鸞聖人 750 回大遠忌法要に向けて掲げられた「親鸞聖人の世界」の企画の下に実施された六カ年計画の第四年次に当たる取組みであります。

2. 最も胸を打った発表

(Ref 当日のパンフレット P7-8「第 部 御影堂をささえるもの」の当該部分の記載とプレゼンテーションより)

当日聴講参加した愚住の目を通して、最も胸を打った発表を一件に絞ってご紹介致しますと、それは、NHKエンタープライズ企画事業ディレクター菅原健一氏による「御影堂を支えるもの」でありました。

御影堂修復工事は、1999 年から 2009 年迄 10 年に亘って実施されました。

御影堂は国の重要文化財であり世界文化遺産にも登録されている親鸞聖人の御影像をご安置する浄土真宗本願寺派の根本道場です。間口 62m、奥行 48m、高さ 29m、瓦の総数 11 万 5 千枚に及ぶ壮大さを誇ります。日本の木造建築技術が頂点に達した江戸初期を代表する建物で国指定文化財としては東大寺大仏殿に次ぐ世界最大級の木造建築です。

江戸時代の寛政文化年間以来、実に 200 年ぶりに当たる平成の大修復は、実に総工費 56 億円、述べ 6 万人にも達する職人が参加した日本の近代文化財史上まれに見る大工事となりました。関った職人は宮大工、左官、瓦職人、建具師、屋根葺(ふき)師、畳、金箔、漆、障壁画、彫刻等に亘ります。今、伝統建築や日本家屋の減少などで伝統職人が腕を発揮する場が激減し、どの分野も危機的状況にあるといわれますが、平成大修復に関った職人たちは渾身の力を込めて修復を完遂されたことであります。

江戸初期には様々な城郭や清水寺本堂、知恩院御影堂等大規模な木造建築が次々に築かれた建築ラッシュの時代だったと伝えられ、それには幕府や大名が介在したなかであって、御影堂だけは全国のご門徒が自ら材料、金銭、労働力を持ち寄って第一級の職人たちと共に作り上げた純然たる民間建築であることで異彩を放っています。

内部の幅 1m もの巨大な梁(はり)には「備後御置講」「河内御鏡講」「南紀冷水浦同行中」等々全国各地の「講」からの寄進を示す墨書が残されています。

文献調査によれば、内陣彩色の顔料が長州から寄進されていたり、越中の門信徒が人足 500 人・大工 50 人の労働寄進を申し出ていたり、北は陸奥から南は薩摩に及ぶ全国の門信徒が総力を結集して取り組んだことが判明しています。

例えば、200 年前の修復では、長野県野尻湖畔の門信徒たちが 1 本の巨木を寄進しまし

た。重機も車両もない江戸時代に山深い信州から1 t近い大木を切り出し、幾人もの人々が力を合わせて何とか京都へ運搬しました。山間の巨木は秋から冬にかけて伐採し、極寒の中、雪の力を借りて谷へと落とし、谷の水で下流へと水運し、海に出て日本海から遙か瀬戸内へと回り淀川をさかのぼり、京都では陸路を人力「えいや」と引いて来たのだそうです。淀川は全国からの巨木を運ぶ水運の中心でありましたが、時には橋を壊して物議を醸すなどのハプニングもあったそうです。工事中きつとつらい出来事もあったに違いありません。どれ程の歳月がかかり何万人もの門信徒が協力しあったことでしょう。そうした木材だけでも御影堂には数百・数千と使われています。瓦一枚、釘一本、その一つ一つ全てに門信徒たちが親鸞聖人、蓮如上人から頂戴しお育てに与った篤い心と努力が封じ込められ、すぐれた伝統職人の手で掛け替えのない建築物へと昇華されて行ったのです。

200年前、御影堂修復を成し得た1810年、当時の第19代御門主本如宗主は、次のような御消息を残して門信徒たちをねぎらっています。

「…人々志をはげましつつ、山野に霜をふみて木材を引き、梁(はり)、薨(いらか)に露を凌(しの)ぎて瓦を運び…」

そもそも、御影堂は親鸞聖人がご往生されて10年後の1272年、御遺骨をお移した佛堂から始まるとされています。その後、度重なる戦火や1596年の慶長伏見の大地震で倒壊するなど数多の災害に見舞われますが、その都度迅速に復興され、1636年に現在の御堂が造り上げられました。

その影には、親鸞聖人とそのみ教えをお慕いした全国津々浦々一人一人の門信徒の力添えがあったことは申すまでもなく、み教えに育てられた門信徒と職人たちが提供する技と素材を通して大切なものを次世代に残してゆきたいとの強い意志が感じ取られます。

この間、いつしか、建築様式も、従来の佛堂形式から、全国の門信徒を迎えることを中軸に据えて設計した道場形式となって結晶して行ったのです。

御影堂の下陣から仰いだのでは高くとても見えない蛙又(かえるまた)の彫刻には中国の親孝行の逸話である「二十四孝図」が刻まれています。壺は当時は贅沢品だったのですが、全国からの門信徒を迎える下陣一杯に敷かれたのでありました。

(将来に向けて)平成の大修復はこうして無事完了しましたが、遠い将来に向けて私たちが心して取り組むべき課題があります。それは、次の時代にみ教えに育てられた心と技術が確かに伝えられるよう心すべきであり、技を伝統として継承する意識付けであります。

心が育てられ継承されるためには、如来様のお喚び声に呼び覚まされて賜る信心が確実となるように末寺やご家庭でのお聴聞の習慣づけが大切であることは申すまでもありません。また、技術が伝統技術となって継承されるためには、一人一人の消費者が日常の消費スタイルを通して技術のCo-Producer(共同制作者)となっていくことが大切です。それにはただ単に安い物を購入するのではなく、技術継承への投資が必要なのだという事を氏の発表を通して痛感した次第でありました。

(後書き)発表者の菅原健一氏は1977年生まれ中央大学文学部に学び社会学科卒業と伺

いました。私事に亘って恐縮ですが、奇しくも、龍谷大学社会学科を卒業し、ただ今南米開教区の最前線で活動している当院正覚寺新発意と同年であり、私には、両者が重なって見えたことでありました。

3. シンポジウムに対し愚住が主催者側に提起させて戴いた反省事項

1. 質疑応答の機会が全く与えられていませんでした。

壇上のパネリストとコーディネーターのやり取りのみを聞かされている聴衆はその過程で素朴な疑問を抱くものです。そうした疑問を取り上げてパネルディスカッションを活性化する手段が全く顧慮されていなかったのではないのでしょうか。

素朴な疑問の例として、「門徒もの知らず」が挙げられます。これは、「門徒もの忌み知らず」が原点にあり、訛ったものと理解しておりましたが、当日の冊子には「門徒もの知らず」がより広い概念のように記載されていました。本当にそうでしょうか。またコーディネーターとパネリストとのやり取りの中で愛知のお同行の歴史の中には「ほとけほとけ」という理解があったと説明がありましたが、本当にそうでしょうか。浄土真宗の御門徒ならば、死者をほとけと呼ぶとは俄かに理解しがたい思いであります。

2. 再建にかかわったお同行に息吹発掘について

今回のプレゼンテーションの中で最も感動したのは前述の菅原健一氏の「御影堂をささえるもの」に見られる 360 年前の再建に関わったお同行の息吹でありました。

因みに、土台の土づくりに労働奉仕したお同行が休憩時間に旗を立てて「もっとやるぞ」とお声をあげていらっしゃったというくだりに至っては大きな感動を覚えました。今日の宗門が忘れ去った門信徒のエネルギーがそこには感じられたのであります。教学伝道研究センター様では、こうしたエネルギーの原点を発掘する研究が進められているのでしょうか。お教え戴ければ幸いです。

3. 発表方法とアクセスへの便宜と

引野先生の発表以外はパワーポイント等によるプロジェクターによる発表でありました。このような場合、暗くて速くて要点を記録することすら不可能です。折角の成果についてもすぐ後で確認する手段がありません。NHKの報道のように後でウェブサイト上ですぐにアクセスして要点だけでも追体験できる手段を提供して戴けないのでしょうか。

特に、菅原氏の発表内容は映像情報とタイアップしていらっしゃいますので、その内容を私共が追体験できるような仕組み(DVD による提供)をお考え戴けると有り難いと存じました。それによって、末寺では多目的に活用する手段が増えるわけであります。

(備考)御影堂平成大修復の事業行程の半ばより完成までを中心に記録した映像DVD(NHKで前後 10 回に亘って放送されたものを約 2 時間に圧縮したもの)については「御影堂平成大修復 よみがえる信仰の伝道」として本願寺御影堂平成大修復推進事務所より平成 21 年 8 月付けで各末寺へと配布されております。尚、この度のシンポジウムでは放送されなかった貴重な情報を含めての御発表でありました。

4. 開明社支援について

開明社様は、37 社よりなると窺いました。しかし、私共はその実態を全く知らないのが実情です。せめて、この機会にその全貌を全国のお同行にもわかるように、御本山参拝者がツアーを組んで回れるように情報をインターネット上で公開して戴けると幸いであり、御本山の参拝に際してツアー案内をなさるとよいと存じました。

尚、井口先生が或る意味開明社様の代弁をしていらっしゃるようにも受け止められましたが、例えば、聞法会館は一人会館のみならず、開明社所属旅館の宿泊も一緒に勤める配慮が必要ではないかと感じました。

5. アカデミックを優先するのか念仏の土徳を優先するのか

去年は、東大の先生方をお迎えになってシンポを開催されました。そのときの様子が蘇って参るのですが、龍谷大学の学者先生方のお顔が賑やかでありました。今年はさっぱりでありました。厳しいことを申すようですが、一体、宗門学究者はアカデミックを優先し念仏の土徳を粗末にしていらっしゃるのではないかと懸念されたものであります。

折角パネリストにお迎えになった去年の末木文美士氏からは阿弥陀仏を粗末にする遺憾な発言さえ聞かれたのであります。学者とは申せ信心や宗教心をないがしろにする不遜の輩を何故に宗門内にお招きになるのか大いに疑問を覚えたものであります。

アカデミックを珍重するだけでは、ダイナミックな信心獲得のプロセスは明らかにならず、嘗ての御堂再建に見られたお同行のエネルギーの原点を訪ねることはできない相談ではないかと窺えるからであります。

6. 当日の研修資料を多目的に活用させて戴きます

当日の参加者数が少なかったことを残念に思うものであります。穿った見方かもしれませんが、昔のパネリストと異なり、宗教的真實を大切になさる学者が少なくなったせいもありましょうが、こんなことなら、御本山まで赴いてお話を聞くに及ばないとお同行の皆さんがお感じになった影響が出ているのではないのでしょうか。

尚、小生は、翌日お願いしてパンフレットの残部をお送り戴くようにおねがいましたところ、センター事務局には快く対処して戴き、即落掌致しました。資料は直後に実施致しました組内住職研修会でご紹介しましたし、また年明けてのお同行の研修会で大切に使用して戴く予定でございます。御世話下さった齋藤様誠に有難うございました。合掌

著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)

〒520-0501 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥

URL: <http://syohgakuji.web.fc2.com/>

E-Mail: mhkatata@pluto.dti.ne.jp